TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

フィリップ・ソレルスによる『地獄の季節』の解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Philippe Sollers, Arthur Rimbaud, Une saison en enfer, Lautréamont 作成者: 小山, 尚之 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1261

Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology, Vol. 12, pp. 48-67, 2016

フィリップ・ソレルスによる『地獄の季節』の解釈

小山尚之*

（Accepted October 28, 2015）

Exegesis of “Une saison en enfer” by Philippe Sollers

Naoyuki KOYAMA*

Abstract: This article is a translation into Japanese of the article entitled ≪*Une saison en enfer*≫: *ALLER ― RETOUR*, which was published in *L'INFINI* no.122 in 2013. According to Sollers, absence of the 18th century and the romanticist society or subjects appear to Rimbaud as Hell. To Go in Hell means to criticise the contemporary society. But at the same time, Rimbaud tries to return from Hell by inventing a new type of reason and a new form of love. In this point Sollers finds in Rimbaud a precursor of Nietzsche and Heidegger. Furthermore, he thinks that Rimbaud is enlightened by gnostic lights in origin.

Key words: Philippe Sollers, Arthur Rimbaud, Une saison en enfer, Lautréamont

はじめに

本稿はA. ランボーの『地獄の季節』(一八七三年）をめぐってF. シャルパンチエとPh. ソレルスの間で交わされた対談を翻訳したものである。対談は≪Une saison en enfer≫: ALLER ― RETOURと題されて*L'INFINI*誌二〇一三年春一二二号の三ページから二五ページに掲載された[1]。訳者が何故この記事に興味をもったのかというと、シャルパンチエも指摘しているように、ソレルスのエクリチュールにおいてはランボーがしばしば引用されているからである。一体ソレルスはランボーをどのように咀嚼して自家薬籠中のものとしているのか。このような関心からこの記事の翻訳を試みようと考えた。そして翻訳しているうちに、これはランボー論としても面白いのではないかと思うようになった。

原文のテキストには一切脚注はない。従ってこの翻訳に付されている脚注はすべて訳者による。ランボーのテキストの翻訳については様々な既訳書を参照させていただいた[2]。しかし対談の文脈によっては既訳に頼らず文字通りに訳したほうがよいと思われる部分も多くあったので、ランボーからの引用もすべて訳者の拙訳に依っている。ただしランボーのどこから引用されているのかを明確にするために、宇佐美斉氏の訳本における当該箇所を参照項として脚注に明示してある。

『地獄の季節』
行くこと―帰還すること

フランク・シャルパンチエ　：　ランボー研究の決まり文句「文字通りにそしてあらゆる意味において」(これについては後で戻るでしょう）に従って『地獄の季節』を踏破する前に、この対話を三つの点で始めることをお許しください。その三点はおそらく一つの点にしかならないのかもしれませんが、この、短いけれども濃密な、強度のある、謎めいてもいるテキストを読解する間、ずっとわれわれに随伴することになるでしょう。言っておかなければならないのは、このテキストは、ランボー自身が出版させた唯一のものであり、その執筆時期は一八七三年四月から八月となっていることです。まず第一点は、あなた自身の著作においてランボーの存在が明らかに卓越した地位を占めているということです。続いて第二点は、これから必然的に導き出されるのか否か分かりませんが、十全な形でのあるいは空っぽな形での地獄がまた卓越した地位を占めていることの重要性です。あなたはたびたびあらゆる形態のもとでの地獄を描写し解読なさっています。そして最後に第三点は、副題として選ばれた「行くこと―帰還すること」です。この副題について一言申しておきます。これはランボーが「地獄堕ちの手帳」と呼んでいるテキストの予備的な命題として、しかもそれは一つでありながら多くを含む命題と

* Department of Marine Policy and Culture, Division of Marine Science, Graduate School, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan（東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門）

1 *L'INFINI*, no.122, Printemps 2013, pp.3-25.

2 たとえば『ランボー全集』平井啓之・湯浅博雄・中地義和・川那部保明訳、青土社、2006年。『ランボー全詩集』鈴木創士訳、河出文庫、2009年。『ランボー全詩集』宇佐美斉訳、ちくま文庫、1996年、など。

して選ばれました。というのもこのテキストは、それでもやはり全く曖昧さのない救済の調子で終わっているからです。

始めるにあたってこのことを思い出しておかねばなりません、ランボーはあなたの著作全体を通じてつねに現前しています。ただたんにあなたのほとんどの小説の中だけではありませんが、ランボーの現前がより明白で輝かしい小説の筆頭はもちろん『ステュディオ』*Studio* です。そこにランボーはヘルダーリンとともにいます。それは偶然ではありません。ヘルダーリンも偉大な文学的「登場人物」の一人です。だがそれだけでなく、数多くのあなたの評論、エッセイ、エッセイ集の中にもランボーはいます。例えばあなたの『イリュミナシオン』*Illuminations* というエッセイ集では明白です。また最新の集成のひとつだけを挙げれば『申し分のない言説』*Discours Parfait* があります。こう言うことができるなら、ここにランボー的な真理の顕現（エピファニー）が三つ以上は数えられます。そのうちの一つが「ランボーの救済」です。また付け加えると、ランボーは、これらのエッセイの性質が文学的であろうとなかろうと、絵画に関するエッセイにももちろん介入してくることがあります。そういうエッセイではランボーは例えばセザンヌやピカソなどとしばしば対話しています。そして最後にランボーは、『ポーカー』*Poker* から『神曲』*La Divine Comédie* に至るあなたの対談集の大部分にも見出されます。特に後者ではランボーは主要な役割を演じており、本質的に今日のわれわれの関心を占める問題に向けて合図を送っています。その問題とはあなたが「地獄の体験」と呼んでいらっしゃる問題です。人が何について語っているのか知るために言わば立てる必要のある問題です。『地獄の季節』の問題です。つまり、このテキストのラディカルな新しさが地獄に終止符を打とうとする「決断」（と私は呼びたいのですが、検討する必要があるでしょう）である限り立てるべき問題です。ただあなたがしばしば強調されてきたように、地獄で過ごすのはたった一度だけ、一つの「季節」だけに留めることにして……。

このことはわれわれを第二の点に導きます。すなわち、あなたの著作における、まさに「地獄」の存在と、あえて言うならばその「ネガ」である楽園の存在です。例えば、しばしばあなたの小説の冒頭部分では、『神々しい生活』の話者のように、語り手は、苦痛に満ち、行き詰まり、無言症的な、要するにほとんど地獄的な状況から我が身を外に出し、逃げ出さねばなりません。あるいは、「彼処での女たちの地獄」や、あるいは終わりなき最終段階に入っている見世物的でニヒリスト的な現代版の地獄についての明晰さの中に、あるいは反対に、歓喜にあふれた勝利声明の中に、地獄があります。あなたの小説『楽園』*Paradis* と『女たち』*Femmes* は多くの点で、重く緩慢な硬直化のうちにある、すなわち「死に至る病」（キルケゴールの表現に倣うと）のうちにある人間の条件という地獄を、楽園的に、すなわちものすごい速さで横断したものであると主張することさえできるでしょう。

最後に、あなたには親しいテーマで、その特異性をバルトがとても早い時期から気づいていた、あの絶え間のない揺れ動きは、第三のそして最後の点として、この対談のために採用された副題「行くこと—帰還すること」へとわれわれを導きます。「行くこと—帰還すること」はわれわれの旅路の支えとして言わば役立つことでしょう。この副題は、私が選んだのですが、いずれにせよ思い出すままに言いますと、優れて詩的な天才ヘルダーリンの危険の多い体験に由来するものです。「パトモス」の最初の節の終わりでのヘルダーリンの言葉によると、その体験は次のように表明されうるのです。

「ああ！　われわれに翼を与えよ、彼処にわれわれが
行き、信仰深い心たちよ、
そしてわれわれがここに戻ってくるために！」[3]

この「行くこと—帰還すること」というのは、ランボーという休みなく歩き旅行する者の運命、その生涯の最後に至るまでの出発と帰還、あるいはその逆といったことを同時に喚起しますが、しかしそれはまた三つの時間を孕む読解へのあり得るべき誘いとしても鳴り響きます。この読解において重要となるのは、このテキストを言わば簡潔に踏破することによって、この表現そのものの中に含有されている「行くこと」、連結符すなわち二つの間、そして「帰還」という三つの契機を、同時に掴み、省察し、問うということになるでしょう……。別様に言ってみます。地獄に行くということ、そしてそこを体験的にまた言葉の上において一巡りするということ、これは結局、深みにおいて、細部において、的確で個別的な語で言うと一体何を意味するのでしょうか？　続いて二つの間のことです。この絶え間のない「行ったり来たり」のうちには一体何が賭けられているのですか？　この「行ったり来たり」はまた、『地獄の季節』とそれ以前のランボーの作品との間で、その書き直しという形で繰り広げられ（このことについては後で見るでしょう）、さらに『地獄の季節』とそれ以後のランボーの作品との間では、その直感、予感、「晴れ間」という形で展開されています。またもっと言うなら、このテキストそれ自身と現在のフランス語の図書との間にも、直接的にであれそうでない場合であれ、その詩行の、もちろんあなたの本の中にあるような形での「行ったり来たり」があります。そして最後に、出口、複数の出口、救済がありますが、どんな救済なのですか？　地獄の外にでるというのは、もともとプログラムには予定されていず、それもそのはずであるとき、それは一体何なのですか？　言葉を換えると、この帰還の、この「状況の反転」の場、複数の場、表現、複数の表現とはどんなものなのですか？

こういう訳ですので、早速このただ一つのテキストに集中したいと思います。私の知る限りこのようなことはいまだなされてこなかったと思います。そして文字通り「主題

3　F. ヘルダーリン「パトモス」。Cf.『ヘルダーリン詩集』川村二郎訳、p.182、岩波文庫、2002 年。

の核心」に入っていく、言い換えると、「人間の戦いと同じほど野蛮な精神の戦い」における一人称でなされたこの奇妙な経験の、いまだ生きている主題にアプローチしていきたいと思います。それではテキストを開始する「かつては」Jadis から引用を用いながら始めましょう。この「かつては」の歴史的、「歴史学的」historiale[4]、あるいはまた神学上の神秘解釈的な射程を問うことが当然できるでしょう。

「かつては、私がよく思い出してみると、私の生活は宴だった。その宴ではすべての心が開かれ、あらゆるワインが流れていた。

ある晩、私は《美》を膝の上に座らせた。――そして彼女を苦いと思った。――私は彼女を侮辱した。……。いかなる喜びも絞め殺そうと、その上に私は猛獣の音無しの跳躍をした」[5]。

ではまず、地獄へ行くことは、あなたによれば、意志による「決断」でしょうか？　無意識的なものですか？「悪魔に憑かれた」ものですか？　装ったものですか？「言葉だけ」のものですか？　いずれにしても必然的なものとして提示されているこの体験とはどんなものなのか？　また苦いと思われているこの「美」は何なのでしょう？　どうしてランボーは先ず始めに、あなたがよく引用なさる（特に『例外の理論』*Théorie des Exceptions* で）カフカの言葉である「殺戮者たちの列の外への跳躍」[6] とは反対の跳躍を、ただちになしている（ように思われる）のですか？　おまけにその跳躍は、死と調子はずれの音という二重の意味を持っている「最後の***ぎゃあっ***」le dernier *couac*[7] を叫ぼうとしているときにまさになされていると明示されています。

１．地獄への「跳躍」……

フィリップ・ソレルス　：　まず私はあなたの質問の最後の部分における二つの点から始めます。あなたが正当にも問うていらっしゃるこの「かつては」Jadis という語は、優秀なラテン語学生であったランボーのことを考えてみますと極めて意味深長なものです。Jadis はラテン語の dies から来ています。il y a « dis » というのは「すでに数日前に」il y a déjà des jours という意味です。語源を探してみてください……。他方、あなたが聞き取らざるを得ない「ディス」dis という語がすぐに突出してきます。そしてそれは、「豊かな」、「豪奢な」、「豊富な」という意味を持っています。ランボーは、つねにラテン語学生として、これらすべてのことにとても意識的です。そしてギリシア語の「ハデス」Hadès（「プルトン」Pluton とも）のラテン語名が「ディス」Dis であることにも自覚的です。ですからわれわれは最初から冥界の圏域にいるわけです。ここで問題になるのは「歴史」Histoire であると同時に「歴史学的なもの」historialité であることをわれわれは続く部分において見ていくことになります。

「最後の***ぎゃあっ***」le dernier *couac*、これは死であると同時に調子外れの音です。ですから死は耳に調子外れな音として出現するものと着想されているのです。おそらく『地獄の季節』の中でイタリック体で書かれている語すべてについてやるべき研究がまだあるでしょうね。われわれがここでそうする時間はないでしょうが、指摘だけしておきます……。すなわち、たとえば、しばしば介入してくるラテン語での表現などです……。

F.・シャルパンチエ　：　フランス語の下に隠された形のものですか、それとも直接ラテン語で書かれたものですか？

Ph.・ソレルス　：　ラテン語で、ラテン語で書かれたものです……たとえば「***彼ハ生レルダロウ***」*Orietur*[8] です。これは教会のラテン語、歌われたラテン語の一部です。あるいは「***深キ淵ヨリ主ヨ***、馬鹿だ、私は！」*De profundis Domine*, suis-je bête ![9] これもまたラテン語です……。イタリック体が示しているのはただたんに「最後の***ぎゃあっ***」というのが二つの意味をもつ、つまり死でありまた調子外れな音であるということです。従って死は調子外れな音である。これらすべては知覚としては非常に音楽的ですね……。

それでは「美」を膝の上に座らせるとはどういうことでしょう？　（*読む*）「かつては、私がよく思い出してみると、私の生活は宴だった。その宴ではすべての心が開かれ、あらゆるワインが流れていた」。結構です。かつては……。それはいつだったのか？……。たとえば「昔々あるところに」il était une fois ですかね……。それから「宴」……。宴という語はとても重要です。神々の宴などと使われます。さらにそれから苦々しい「美」Beauté……。

4 「歴史的」historique と「歴史学的」historial の区別は、ハイデガーにおける Geschichte と Historie の区別に呼応しているようである。Cf. M. ハイデガー『存在と時間 下』細谷貞雄訳、pp.342-343、ちくま学芸文庫、1994 年。「現存在の存在の歴史が歴史的であるということは、それが脱時的＝地平的時間性にもとづいて、おのれの既往性において開かれているということである。そしてそのかぎりで、実存において遂行される《過去》の主題化という作業は、一般に開かれた軌道をもっているわけである。そして現存在が、また現存在のみが、根源的に歴史的なのであるから、歴史学的主題化が歴史研究の可能的対象として提示するものは、かつて現存していた現存在という存在様態をそなえていなくてはならないことになる」（強調は訳者による）。

5 『地獄の季節』冒頭部分。Cf.『ランボー全詩集』宇佐美斉訳、p.245、ちくま文庫、1996 年。

6 「カフカの日記」1922 年 1 月 27 日。Cf.『カフカ全集 VI』近藤圭一・山下肇訳、p.355、新潮社、1959 年。

7 『地獄の季節』冒頭部分。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.246。

8 「錯乱 II」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.291。

9 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.254。

F.・シャルパンチエ　：　大文字のBで始まっています。これはのちに礼賛されるであろう、小文字をほどこされた美 beauté[10] とは対照的です……。

Ph.・ソレルス　：　大文字のBで始まる「美」Beauté、そうですね……。どのようにして「美」を膝の上に座らせる機会を見つけたのでしょう、とても不思議です。何故彼女は苦々しいのか、いつからそうなのか……。そしてすぐさま美は「希望」と関連付けられ、同一視されます。「美徳」……。このあとすぐ三つの対神徳[11]が現れるのに注目してください。やがてわれわれは「慈愛」に行き着きます。確かにここには「信仰」はありませんが。続いて私を打つのがこれです、「私は狂気にたいして悪戯を仕掛けた」[12]。というのもご存じのように、あとの方に「私は狂気の体系を握っている」[13]が来るからです……。それでは（*区切って読む*）「私は……おそらく食欲を……取り戻せるような昔の宴の鍵を……探そうと……夢見た。慈愛がその鍵である。――こんな霊感は私が夢見たことを証明している」[14]。ここでのランボーに関する注釈はみな極度に混乱しています。それらはすべて、この、こう言ってよければ形而上学的なテキストについての神学的な、深く神学的な意味をできる限り避けているのです。それらの注釈が理解するのを避けているのは次のようなことです。鍵としての慈愛とは本当には何で「あるのだろう」*serait* という霊感が、まさに私が夢見たことを証明しているのです。この前のパラグラフ全体とともに、ここで夢見ることとは、普通そう思われているように、「美」を膝の上に座らせたことや、正義に対して武装したことではありません。そのパラグラフは実際には「悪魔憑き」*possession* の状態を描いているのです。その上この「悪魔憑き」という語は、あの見事な表現（これについても多くの人が誤っていますが）とともに『地獄の季節』の最後に現れることになるでしょう……。

F.・シャルパンチエ　：　「***一つの魂と一つの身体の中に真理を所有すること***が私には許されるだろう」Il me sera loisible de *posséder la vérité dans une âme et un corps*……[15]。

Ph.・ソレルス　：　その通り。そしてそれは「一つの魂の中と一つの身体の中」dans une âme et dans un corps ではないのです。ランボーはとても的確ですね。重要なのは、一つの魂と一つの身体の中に、真理を、所有する（に取り憑く）posséder ことなのです。つまり、私は悪魔に取り憑かれていた（所有されていた）J'ai été possédé のです！しかしこのことが言わんとするのは、昔の宴の鍵を見つけるには、慈愛が鍵「だろう」*serait*、ということです……。

F.・シャルパンチエ　：　「カリタス」Caritas のことですよね。その「魔法にかけられた慈愛」とは反対の。この表現はあとで狂気の処女の口を通して見出されるでしょう……。

Ph.・ソレルス　：　ええ、そうです。そして自余のすべては夢、悪夢、悪魔に取り憑かれた夢であろうというわけです。さらにここにその人物自身が登場します。「私に戴冠した悪魔（デモン）」、「お前はハイエナのままでいろ、等々……」[16]と言う悪魔（デモン）です。これらすべてはとても論理的に続けられます。彼は悪魔（デモン）が彼に語りかけるのを聞く。それはやはりサタン自身のことです。ところで、このサタンの登場の物語は、ランボーの地獄堕ちの手帳の醜い「何」ページかを避けて通れない体のものでしょうが、あなたもご存じの通り、手書きの『地獄の季節』の原稿の裏面には「福音書的な散文」[17]と呼ばれているものが見出されるだけに、それだけ増々興味深いものです。それにこの「福音書的な散文」これまでそれほど注釈されてきませんでした……。

F.・シャルパンチエ　：　あなたはそれを『イリュミナシオン』でなさっています……。

Ph.・ソレルス　：　……「福音書的な散文」、それはランボー研究家たちを困惑させるのです。……他方、「福音書的な散文」は、『地獄の季節』の草稿が証しているような並大抵のものではない沸騰と泡立ちから抽出されたテキストであることに気づくことが非常に重要です。ところで『地獄の季節』の草稿も、何が取り除かれ何が残っているのかを見るために一行一行研究されてもこなかった……。

F.・シャルパンチエ　：　決定版（もしこう言うことができるとすればですが）と矛盾するような「草稿」の側面が消されてさえいますね……。しかしともかくわれわれはサタンを話題にしているのでした。サタンは、ヘブライ語で「シャターン」*Shatân* と言い、障害、敵対者、敵、を意味します……。

Ph.・ソレルス　：　ええ……。

F.・シャルパンチエ　：　では次の表現についてどう考えるべきでしょうか？「私は地獄にいると信じる。ゆえに私はそこに在る」[18]。言い換えてみます。地獄の至高の

10 「錯乱 II」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.295。
11 三つの対神徳とは、「希望」espérance、「慈愛」charité、「信仰」foi を指す。
12 冒頭部分。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.246。
13 「錯乱 II」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.293。
14 冒頭部分。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.246。
15 「別れ」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.308。
16 冒頭部分。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.246。
17 Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.235-242。「『福音書』にかかわる散文」。
18 「地獄の夜」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.263。

策略は、悪魔の策略と同じく、地獄は存在しないと信じさせることなのですか？　それとも反対に地獄は存在すると、一方でそれはたんに幻覚によるのかもしれないが、信じさせることなのですか？　つまり地獄は幻影なのか現実なのか、そのどちらでもあるのか？　そしてそれはいかなる魔力によるのか？

Ph.・ソレルス　：　最も重要な表現が「私は地獄にいると信じる。ゆえに私はそこにある」です。ランボーは、悪魔がおのれを存在しないものとひとに信じさせているとは決して言いませんでした。そう言ったのはボードレールです[19]。あなたはボードレールにさりげなく触れていますが、ボードレールは別のところでこう言っています。「何人も悪魔以上にカトリックではない」[20]。これはまったく別のことです。ランボーの場合、われわれが関わり合うのは自分の魂を「お前」と呼ぶことができ（「私の永遠の魂よ、お前の誓いを守れ」[21]）、それと同時にサタンそのものと対話を行うことができる何者かなのです。サタンとの対話はボードレールの「サタンへの連禱」[22]にあります。ランボーはこれらすべてをもちろんとても注意深く読んでいました。

F.・シャルパンチエ　：「ボードレールは第一の見者であり、詩人たちの王であり、***真の神***です」[23]。

Ph.・ソレルス　：　もちろんです……。しかし歴史的であると同時に歴史学的に正当な観点にわれわれが身を置きなおすには、私の考えでは、われわれはロマン主義とそれに固有の所有物の歴史的な清算の最中にあるということを理解する必要があります。ロマン主義の所有物は、ランボーより少し前の、ロートレアモンの『マルドロールの歌』と『ポエジ』によって見事に片付けられました。これは新しい理性の樹立なのです。ランボーが向かうのは明らかにこちらの方です。ロートレアモン、ランボー、ニーチェ、ハイデガー……。あなたは正当にもヘルダーリンを引用なさいましたが、しかしよく見なければなりません……。歴史の矢は、一挙に二五〇〇年前まで、お望みならパルメニデスまで遡ることができます。でも結局ここでは、ことが起こっているのはフランス語とドイツ語においてであり、とても正確な日付を持っているではないですか……。ロートレアモン、ランボー、ニーチェ、ハイデガー……。このような順序で考えるべきです。そしてこの問題におけるニーチェ、ハイデガーを忘れてはなりません。

それはさておき、すぐさま明らかになるのは、何故「ガリア人」なのかということです。続く部分に、もう少し先に行きましょう。もうヨーロッパです。「私の知らぬヨーロッパの家庭など一つもない。――私の家庭のようなものを私は家庭と言っているのだが、これらの家庭はあらゆるものを人権宣言から授かっている」[24]。おやおや！　しかしなんて興味深いのでしょう。どうしてすべては人権宣言とともに起こったのでしょう？　われわれはこのような地点に徐々に逆方向に向かっています。というのもわれわれは、多分あなたもお気づきのように、一九世紀に、一九世紀の偉大さのない一九世紀に戻ってしまったからです。われわれはコレーズ県の県庁にいるのです[25]。二〇世紀には何も起こらなかった……。さて続きが告げられます、「フランスの歴史」と。ランボーがこの閃光を放つテキストで、前世紀のいかなる状況にも自分を認めないとあなたに言うとき、彼にとっての前世紀とは一八世紀のことです。そして彼はその世紀に自分を認めない。一八世紀は明らかに、言わば、人権宣言によってギロチンにかけられたのです。「フランスの歴史のなにがしかの地点に先行者たちが私にいたなら！」[26]。感嘆符がついています。「いや違う、皆無だ」。ああ、なんと興味深いことでしょう。そしてすぐさまこれです。「《教会》の長女フランス」[27]。従って彼は歴史的な展開の中にいるわけです。それは十字軍や、ジャンヌ・ダルクや、あなたのお望みのものであり得るわけで、いずれにせよ中世ですね。彼は魔女(サ)の(バ)夜宴(ト)を踊っています。しかし一八世紀は存在しなかったのです！　キリスト教と「この大地」、それはとても素晴らしい。人権、とても素晴らしい。しかし「前の世紀に私はなんだったのか？　私は自分を今日においてしか認めない」[28]のです。一八世紀において私はなんだったのか？　私は自分を今日においてしか認めない。すなわち今日とは彼にとって一九世紀のことです。これは非常に奇妙なことです。「劣った種族がすべてを覆った――いわゆる人民、理性、国民、科学を」[29]。

19 Ch. ボードレール「気前のいい賭博者」。『ボードレール全集　第一巻』福永武彦訳、p.329、人文書院、1963 年。「悪魔の最も巧妙な策略は、悪魔は存在しないと諸氏をして信ぜしめることにある……」。

20 ソレルスは「何人も悪魔以上にカトリックではない」Personne n'est plus catholique que le diable と引用しているが、訳者が探し得たかぎりでのボードレールの表現は「悪魔よりもカトリック的な何者かがはたして存在するかと言い得るでしょう」Existe-il, pourrait-on dire, quelqu'un de plus catholique que le Diable（ヴィクトル・ド・ラプラド宛て 1861 年 12 月 23 日付け書簡）であり、若干の違いがある。Cf.『ボードレール全集　第二巻』阿部良雄・豊崎光一訳、p.424、人文書院、1963 年。

21 「錯乱 II」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.290。

22 Ch. ボードレール「サタンへの連禱」。Cf.『ボードレール全集　第一巻』福永武彦訳、pp.96-98。

23 G. イザンバール宛て 1871 年 5 月（13 日）付け書簡。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.465。

24 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.248-249。

25 このセンテンスの意味は不明。

26 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.249。

27 同上。

28 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.250。

29 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.251。

従って彼は一九世紀において地獄にいるわけです。何故でしょう？　どうして彼は、「《教会》の長女フランス」(私は聖別されている表現を繰り返します）から、すべてを覆った「劣った種族」へ跳躍しているようにみえるのか理解する必要があります。地獄とはこのことです。それは一八世紀の不在なのです……。（しばらくおいて）私はこのことが言われるのを聞いたことが一度もありません。

まあいいでしょう。さて今度は科学、新興貴族、進歩がきます。もちろん「われわれは***精神***へと向かっている」[30]。すべてが「精神」へ向かっていると信じるのはその時代の精神であったと理解しましょう。だが注意してください。たとえ私の言うことが「神託」であるとしても、私は「異教徒の言葉」なしには自分のことを説明できないのです[31]。ランボーのこだわる「異教徒」païen という語はいったいどういう意味なのか？　それはラテン語の「パガヌス」paganus すなわち「農民」から来ています。

F.・シャルパンチエ　：　……この語それ自体が何度か繰り返されています。「ペンを持つ手は犂を持つ手に等しい」[32]、そして最後に……。

Ph.・ソレルス　：　はい……。ギリシアやラテンの神々が問題になるや否や、キリスト教は「異教徒たち」という語を用います。これは至る所で普通に用いられた語ですが、「異教徒たち」とはどういう意味なのでしょうか？　あたかも彼らに宗教は無いかの如くですが、ところが彼らの神々はうじゃうじゃとひしめくほどあるわけです。あまりにもわんさとあるので、みなギリシアの神々をラテン語に置き換えることに足を取られてしまうのです。何故なら、もし私がジュピターと言うとすると、それはゼウスと何の関係もないからなのです。もし私がミネルヴァと言うとする……。ところでヘーゲルのミネルヴァの梟というのはとても気品がありますね。まあとにかく、ミネルヴァ、それはアテナとなるわけです。注意してほしいのですが、歴史的であると同時に歴史学的な観点からいうと、アテナとミネルヴァのあいだにある違いは何であるのか？　あるいはウェヌスとアフロディーテの違いは？　あなたも気づかれたようですが、自分の名を保持し続ける神は一人しかいません。アポロンです。

ですからこの語「異教徒」というのはとても不可解で完全に混乱しています。ランボーは、キリスト教の、と言うより他に言葉がないので使いますが、キリスト教のプロパガンダから自由になろうと試みているのです。このプロパガンダは続いて人権と大学の混乱によって繰り返されます。つまり彼は、どのように表現すればよいのか分からない何ものかを感じているということなのです。どのように「精神」へ向かうのか、そうです。だがこれは……敬虔な願いです！　しかも彼は「異教徒の言葉」なしに自分をどのように表現してよいのか分からない。『地獄の季節』は「ニグロの本」[33]であるということを思い出してください。そのことは「異教徒の血が戻ってくる！」[34]だけにますます驚くべきことです。ああ、どうも彼はこの「異教徒」という語に執着していますね……そしてそれが次の言葉に至ります、「何故キリストは私を助けないのか？」、「悲しいかな！《福音》は去ってしまった！《福音》、《福音》よ」[35]。福音という語が三度繰り返されています。ああ、この「《福音》は去ってしまった」に関しては、いずれにせよ百にのぼるほどの解釈がなされてきました……。《福音》は災いの種なのでしょうか？「精神」は自動的にキリストに通じているのでしょうか？　キリストがおそらく彼をサタンから救うことができるのでしょうか……。

F.・シャルパンチエ　：「それはまさに地獄だった。古い地獄。人の子がその扉を開いた地獄だ……」[36]。

Ph.・ソレルス　：　全くその通り……。

F.・シャルパンチエ　：　この表現は明らかに『使徒信教』の形での「クレド」を参照している……。

Ph.・ソレルス　：　……人の子、というのはそうですね。しかし人権宣言の子ではない……。

F.・シャルパンチエ　：　違います！（笑い）……。それでは、つねに歴史的であると同時に歴史学的でさえある質問を。たとえ地獄というものが一八世紀の不在であるとしても、「地獄から外に出る」ためにはより広い時間の足場を持つ必要がありはしないのか？　もし人がこの鍵を持っていないなら、すべてはその人に閉じられたままではないのか？

Ph.・ソレルス　：　まさにおっしゃる通りです。

F.・シャルパンチエ　：　それではこの場合、現実そのものが「流謫の地」として、すなわちグノーシス的に全てが描かれているのではないかと、私は言いたいのですが……。

Ph.・ソレルス　：　もちろん、もちろん……。

F.・シャルパンチエ　：　もしランボーが、鍵となり得たかもしれない一八世紀の特別に「歴史的な」この側面を消

30 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.251。
31 同上。
32 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.248。
33 E. ドラエー宛て 1873 年 5 月付け書簡。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.473。
34 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.251。
35 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.251-252。
36 「朝」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.304。

してしまったとしたら、どのようにして彼はこの歴史を再び手にするのでしょうか？　というのもハムの王国[37]も同じくありますし、従ってその背後にはノアもいるわけです。多くのことがあります……。

Ph.・ソレルス　：　（落ち着いて）……それらすべてがあります……。

F.・シャルパンチエ　：　（笑い）……それらすべてがある……。

Ph.・ソレルス　：　……必然的にそうなります。しかしいずれにせよ彼がわれわれに言っているのは、彼は「異教徒の血」の歴史をどう扱えばよいのか分からないということです。「劣った種族」、これがすべてを覆ってしまったのです。その種族の歴史、つまり人権の種族の歴史です……。

F.・シャルパンチエ　：　問いを違った角度から立ててみます。「神学は厳しい。地獄は確かに下にある――そして天は上に」[38]とありますが、神学は、無論それはランボーによって見直され再解釈されたものですが、一つの武器たり得るでしょうか？

Ph.・ソレルス　：「私は大食漢の食欲をもって神を待っている」のですが、しかし「私はずっと昔から劣った種族の出なのだ」[39]というわけです。つまり彼も人権の種族に属している……。

F.・シャルパンチエ　：　……まあいいでしょう。「上にも賤民、下にも賤民」(ニーチェ)[40]というわけですね。しかし人権だけなのでしょうか？　原罪はないのですか？　あるいは少なくともその二つが？

Ph.・ソレルス　：　私はそう思いません。私はランボーにおいて原罪のほんの些細な痕跡すら見出しません。多分テキストを読み進めていくことによって分かってくると思います。というのも今やキリストと神が現れているのですから。

（*読み続ける*）「私の一日は終わった」[41]……。次は予言です。「私は戻ってくるだろう、鉄の四肢と、黒い肌をもって」[42]。彼はこの続きを考慮していると考えることができます。「今や私は呪われている、私は祖国を憎悪している」[43]。ふむ、祖国は当時もうだめになっているのですね。もう一度繰り返しますが、その変動は一八七〇年から一八七二年のあいだに起こっています。とても興味深いことです。何故ならランボーより少し前のロートレアモンとともにこのことをやはり見るべきだからです。ロートレアモンはフランス語で書かれた書籍に基づいて、雄大な形而上学的反転を突然あなたに向かって遂行し始めます。『ポエジ』を書いているロートレアモンの部屋を想像してみてください。目の前に、ラ・ブリュイエール、パスカル、ヴォーヴナルグの本を、というのも正確に引用しなければならないからですが、持っていなければなりません。あんな風に全部を暗記することはできないのですから、本は持たねばならないのです。記憶といえば、われわれはあとでいかにランボーがみずからの詩を訂正しているか見ることになるでしょう。彼の詩、初期の詩は、一度読み返してみると、非常に強烈な印象を与えるいくつかの詩を除いて、かなり弱い。言わば一八七二年以前は「***詩人***」として彼はかなり弱いのですね。いわゆる偉大な詩篇は一八七二年、すなわち『地獄の季節』の直前から始まります。『地獄の季節』以前は……。ランボーのことをたんに「詩人」であると考えている人がたくさんいます。これは完全な間違いです。彼は並外れて新しく重大な体験を語る一人の形而上学者なのです。

さて、「物心のつく年頃になるとすぐ、私の傍らに苦悩の根を伸ばしてきた悪徳……」[44]ですか。そう、もちろん、急がないようにしましょう。しかしやはり「私は呪われている」[45]。ヴェルレーヌがどんな表現でこれらすべての呪われた詩人たちというものを演出したか、あなたもよくご存知です……。狂気の処女の問題を徹底的に扱う時間はありませんが、しかし狂気の処女のところで、ブルトンを筆頭に、みな間違いを犯しています。「世界を変革すること、とマルクスは言いました。生活を変えること、とランボーは言いました」[46]……。ところでこれはこう言われているのです。「彼はもしかしたら***生活を変える***ための鍵を持っ

37 ノアの三人の息子、ハム、セム、ヤペテのうちの一人。キリスト教においてハムはアフリカ人の祖とされており、18世紀末のヨーロッパの言語学ではアフリカ諸語のことをハム語族と呼んだ。Cf. L. ポリアコフ『反ユダヤ主義の歴史　第III巻』菅野賢治訳、pp.412-420、筑摩書房、2005年。

38 「地獄の夜」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.265。

39 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.252。

40 F. ニーチェ『ツァラトゥストラ』吉沢伝三郎訳、p.240、ちくま学芸文庫、下巻、1993年。

41 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.252。

42 同上。

43 同上。

44 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.253。

45 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.252。

46 A. ブルトン「作家会議における発言」の最終部分。1936年6月21日より25日までパリのミチュアリテ会館において開催されたフランス共産党主催の《文化擁護のための作家会議》で6月24日夜P. エリュアールによって代読されたブルトンのテキスト。ブルトンは会議の一週間ほど前ソヴィエトから来た記者エレンブルクを殴打したため会議に出席できなかった。理由はエレンブルクのシュルレアリスム中傷記事にあった。Cf.『アンドレ・ブルトン集成５』田淵晋也訳、p.215、人文書院、1970年。次の文献も参照せよ。『文化の擁護』相磯佳正・他編訳、pp.490-498、法政大学出版局、1997年。

ているのかしら？」[47]。

F.・シャルパンチエ　：　しかもそれは狂気の処女の口を通してですよね……。

Ph.・ソレルス　：　……全くその通り。また後でこのことに戻りましょう。「狂気の処女」は『地獄の季節』の中で本質的な点の一つです。

続けましょう。「おお、私の自己犠牲、おお、私の素晴らしい慈愛！」[48]。このあとわれわれは徒刑囚という人物像に行きつきます……。「福音書的な散文」というテキストを彼は書き続けませんでしたが、このテキストの中で話題となっているのは、キリストはその日その日をいかに生きていたか、誰と彼は会っていたのか、たとえばローマ兵たちと会っていたとか、どのように彼はサマリアの場末をあるいはベテスダの池を見ていたか、といったようなものです……。もちろんこれらすべては突然変異のあの熱狂と同じ時代のものです。さて、徒刑囚がいます。ちなみにジュネはこのパッセージから多くの効果を引き出しました。「いつも徒刑場が捕らえる扱い難い徒刑囚」[49] とかなんとか……見事なパッセージです！

「女性たちとの乱痴気騒ぎと同志としての付き合いは私には禁じられていた」[50]。何故そうなのか疑問に思いますね。というのもわれわれはここで一九世紀における女性たちとの乱痴気騒ぎ「と」同志としての付き合いの徹底的な禁止の中にすでにいるからです。気をつけて、この「同志としての付き合い」camaraderie という語は重要です。次の言葉を思い出しておきましょう、「女性たち自身が見出すでしょう……」[51]

F.・シャルパンチエ　：　「……未知の事物を……」[52]。

Ph.・ソレルス　：　「われわれはそれらを取り上げ、理解するでしょう」[53]。まあ、いい。ここには乱痴気騒ぎも、同志としての付き合いも、伴侶もありません……。狂気の処女、あるいは不運の道連れを除いてはね。この道連れは「太陽」の始源の息子の状態に再びなりたいと願っています。それはどうも彼に約束されたもののようです。そして毎夜毎夜悪夢の最中に目覚めるのです。続いてジャンヌ・ダルクという教会的なイメージにまたぶつかります。「私はキリスト教徒であったことは決してなかった」[54]、「私は獣だ、ニグロだ。だが私だって救われ得る……」[55]。いいでしょう。もはやニグロしかいません。商人、行政官、皇帝、みなニグロです。ここにもまた悪魔主義があります。もし人が、この上なく悪魔的な著作の中でジョゼフ・ド・メーストルが大革命について言ったことを耳に残していないならば、何故アルチュール・ランボーが「狂気の徘徊するこの大陸」[56] で「人質を供給する」[57] ためにすべての人々が「ニグロ化」しているという事実にこれほど動揺しているのか、理解することはできないでしょう。つまり彼は自分が人質にとられていると感じているのです。「私はハムの子孫たちの真の王国に入るのだ」[58]。分かりました。

F.・シャルパンチエ　：　そしてそれは「偽りのニグロ」の王国ではない……。

Ph.・ソレルス　：　……そうです。そしてこの新しい体験、この「ヴィジョン」においては、自然が何について語っているのか人はもはや分からなくなるということが判明します。「私はまだ自然を知っているのか？」[59]。あなたも、「おお、自然、おお、わが母」と書いてある田園の中にいるランボーのデッサンをご存知ですよね。従ってここでは「***最早言葉はない***」[60] のです……。さて白人が上陸します。結局洗礼に服従しなければなりません。この手の話に終わりはない。ところがこれは即座に次のような主張によって異を唱えられます。「私は心臓に恩寵の一撃を受けた」[61]。なんですって？　このことについてはたくさんの注釈がなされました。あなたも知っているでしょう、ランボーが書き物をしていたテーブルのことを……。この問題はここでは持ち出しません。そしてクローデルという支柱も、妹も、放っておきましょう。しかしたとえ、ランボーが言っているように、良家の子弟の運命が彼には遠ざけられているとしても、彼はやがて「子どものように誘拐されて楽園で遊ぶ」[62] のでしょうか？　それでは楽園はあるのでしょうか？　一つだけあります。『イリュミナシオン』を『地獄の季節』の光に照らして読む必要があります。しかもこれ

47 「錯乱 I　狂気の処女」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.274。
48 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.254。
49 同上。
50 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.255。
51 P. ドメニー宛て 1871 年 5 月 15 日付け書簡。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.462。
52 同上。
53 同上。
54 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.256。
55 同上。
56 同上。
57 同上。
58 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.257。
59 同上。
60 同上。
61 同上。
62 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.258。

はとても稀にしかなされていません。というのも二つのテキストの弁証法が忘れられているからです。「自然は善意の光景でしかないことを私は見て取る」[63]。今や、天使たち、神聖な愛など、なんでもあります。

F.・シャルパンチエ ： ……新しい理性のことですか、「理性が私に生まれた」[64] とあるのは。

Ph.・ソレルス ： すぐにそのことにたどり着きます。そこであなたは直ちに「ある理性に」へと赴くことになるでしょう。「常に変わらず到着していて、どこにでも立ち去るだろうお前」[65]。この理性は主観的なものではありません。これは全く別の理性です。ロートレアモンが『ポエジ』で宣言したばかりの理性と同じものです。この二つのテキストは歴史的に深く関連付けられるべきです。

F.・シャルパンチエ ： 偽りの主体性は追い出されている……。

Ph.・ソレルス ： 偽りの主体性とはロマン主義全般にわたる主体性のことです。ロマン主義自体、フランス大革命による歴史的な産物ですが。そういう主体性が清算される。偽りの理性は清算されるのです。そして人は異なった様態で生きられる時間と空間に関わる全く別の理性にたどり着くのです……。

F.・シャルパンチエ ： どのような別の主体性を伴ってなのですか？ どのような「他者としての私」を伴ってなのですか？

Ph.・ソレルス ： それは最早「自我」Moi では全くない「私」Je です。

F.・シャルパンチエ ： 要するに、ロートレアモンの「私が存在しているからには、私は他者ではない」[66] と、ランボーの「私とは一個の他者である」[67] は……。

Ph.・ソレルス ： ……完全に相互補完的なのです……。「人が私に言ったところによると、私は男性と女性の息子だそうだ。これは私を驚かせる……。私はそれ以上の存在だと思っていた……」[68]。これは同じことです。しかし忘れてならないことは、ロートレアモンはずっと遠くからフランスに来ており、フランスの首枷には捕らえられていなかったことです。そして彼はそれをタルブの帝政高校に来ることによって生きたのです。しかし彼は、ヨーロッパにいないだけにますますより「広大な」野蛮性を有しています。さて、続いて一つのテーマが、これはのちにまた回帰しますが、ここに来ます。「（*強調しながら*）***眩暈を起こさずに***私の無垢の広がりを評価しよう」[69]。これはランボーを「私は無傷のままだが、そんなことはどうでもいい」[70] へ導くものであって、「イエス・キリストを義父として婚礼のために船に乗り込む」[71] 方ではありません。ところで後者は重要な申し出であって、明らかにヴェルレーヌ、「手にロザリオをまいた」ロヨラに向けられています。シュトゥッツガルトでの見苦しい場面は有名です。しかしとても奇妙なことがあります。理性が私に生まれた、理性は私を助ける、だがそれと同時に「私は私の理性の囚人ではない」[72] のです……。

F.・シャルパンチエ ： ……この場合、すぐ後で見られるように、「言葉の錬金術」は言語そのものの書き直しの鍵ではないということですか？ 「私は私の理性の囚人ではない」という場合の理性はまだ歪められているのですか？ 「理性が私に生まれた」というときの理性は、本源に立ち返った言語そのものから出てきた新しい理性なのですか？

Ph.・ソレルス ： ……おっしゃる通りで、どのような理性なのでしょう？ われわれは「理性」を再び見出すために地獄を通過します。それで、そうした後ではこの理性はまったく仮借ないものになるでしょう。「私はエロヒムを感傷的というよりむしろ冷淡なものとして思い描く」[73]。神、以前の神、「創造者」は、ロマン主義と同じように『マルドロールの歌』の中で清算されています。ロートレアモンがあの売春宿のシーン、あの髪の毛のシーン[74]！で見事に論証しているように、神は犯罪者なのです。

F.・シャルパンチエ ： 「神」という語は、ロートレアモンにおいてと同じくランボーにおいても、同様の機能または両義性を有しているのですか？ ロートレアモンにとっては、少なくとも二つの神がいます。「創造者」は、ナンバー・ワンかナンバー・ツーなのかそれは状況により

63 同上。
64 同上。
65 『イリュミナシオン』「ある理性に」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.332。
66 ロートレアモン『マルドロールの歌』「第五歌」。Cf.『ロートレアモン全集』石井洋二郎訳、p.239、ちくま文庫、2005 年。
67 G. イザンバール宛て 1871 年 5 月（13 日）付け書簡。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.451。
68 『マルドロールの歌』「第一歌」。Cf.『ロートレアモン全集』前掲書、p.27。
69 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.259。
70 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.248。
71 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.259。
72 同上。
73 I. デュカス『ポエジ II』。Cf.『ロートレアモン全集』石井洋二郎訳、p.348。
74 ロートレアモン『マルドロールの歌』「第三歌」。Cf.『ロートレアモン全集』前掲書、pp.160-178。

ますが、グノーシスの造物主でもあり得るでしょう。そしてエロヒムは……。

Ph.・ソレルス　：　まあいいでしょう。「神、と私は言った。私は救済における自由を欲している」[75]……。しかしこれもテキストの中の一つの瞬間にすぎません……。さて、ここでとても重要な「地獄の夜」がきます。あの有名な一口の毒……。

F.・シャルパンチエ　：　……毒は「陶酔の朝」に再び想起されていますけれども、その場合はもう免疫のあるものとしてです。「われわれは毒を信頼している」[76]というように……。

Ph.・ソレルス　：　ええ……。ここでは彼は毒におかされ、取り憑かれています。悪魔が彼を個人的に対象としています。そのうえ彼は悪魔をあなたと呼んでいます。もっと後で彼は自分の魂をお前と呼ぶでしょう。「私は自分が地獄にいると思う、ゆえに私はそこに在る。これは教理問答の実践だ。私は自分の洗礼の奴隷である」[77]。何という考えでしょう！　それでは地獄の責め苦は永遠なのでしょうか？　推測するに、そうではありません。というのもわれわれが地獄を通過するのは一つの季節でしかないからです。原理的にこのことは可能ではない。するとまたもや異教徒たちです。「地獄は異教徒たちを攻撃できない」[78]。でもやはりギリシアの地獄ハデスがあります。これは重要なことです。人はそこへ行き――そしてそこから大抵は辛い面会をした後に出てきます。亡霊たちがそこにいます。人は彼らを抱きしめようとする。しかしそれは可能ではない。周囲に血を注がざるを得なくなります。『オデュセイア』をもう一度読んでください。オデュッセウスは、これは一季節だけのことではありませんが、地獄を訪問する。するとそこに……ああ！　なんだ、お母さんがいる……。あなたに言うまでもないですが、母ランボー夫人は十分地獄の代表者の資格を有しています。そのため彼女は軽やかな陽の元に現れないのです。鉛のように灰色の帽子のもとに現れるのです。その反面、これまで真に展開されてこなかったこと、そしてそれを強調したのは私だけだったと思いますが、それはヴィタリーの『日記』です。

F.・シャルパンチエ　：　ヴィタリーの『日記』ですか……。

Ph.・ソレルス　：　私の知る限り、誰もそのことについて何もしてこなかった……。

F.・シャルパンチエ　：　同じくランボーの父、フレデリック・ランボーについてもほとんど言及がありません……。

Ph.・ソレルス　：　もちろんフレデリック・ランボーもです。ランボーはおそらく彼と会っているでしょう、よく分かりませんが。しかしそのことはここではコーランとアラビアへむけての合図となっています……。

（*また読む*）「サタンは言う、炎は汚らわしい……」[79]。地獄を炎に包まれたものとするヴィジョンは明らかに誤っています。やはり特筆すべき地獄の幻視者であったダンテがそうであることを知っています。ただ一九世紀にはダンテは不在で、誰も彼を読んでいないということは別としてですが。ユゴーの『サタンの最後』等々の駄作はあります。それであなたはすぐ眠りにつけるわけです。こうした物語とけりをつけるほうがはるかに真実に近いと私は思います。そして地獄は、もし燃えているとしたら、ボードレールがラクロについて言っているように、氷の如く燃えているのです。「この本は、もし燃えるとしたら、氷のような様態でしか燃えることはできない」[80]。理性はまだここにあるでしょうか？　それは消え去ってしまいました。あのロマン主義と革命の荒廃ののちに、もう一度理性を立て直さなければなりません。従って地獄は徐々に石化の、氷の、……失語症の地獄となっていくのです。地獄に堕ちた者とともに立ち上がる炎、いいでしょう、しかしそれは地獄ではない。悪魔はこの場合……幻覚のさなかに現れるのです。「幻覚は数えきれないほどある。それこそまさに私がつねに見てきたものだ。もう歴史への信頼はない。諸原則の忘却だ」[81]。このことはおのずと読めることです。次いで、サタンとイエスが同じパラグラフの中に並んで現れます。自分のことをキリスト教徒だと思っている人々にやはり次のことを思い出させなければなりません。すなわち福音書は砂漠での誘惑から始まるということ。つまりいずれにせよ二人の人物の出会いを通してなのです。彼らにこれを言ってごらんなさい。ええっと、まずですね、悪魔は存在しません、当然。復活ですか、とっとと飛ばしましょう、となりますよ。なあに、いいでしょう。しかし砂漠での誘惑、福音書が始まるのはこのようにしてでないでしょうか？　違いますか？

75 「悪い血」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.259。
76 『イリュミナシオン』「陶酔の朝」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.334。
77 「地獄の夜」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.263。
78 同上。
79 同上。
80 Ch. ボードレール「『危険な関係』についてのノート」。Cf.『ボードレール全集　第三巻』菅野昭正訳、p.271、人文書院、1963 年。
81 「地獄の夜」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.264。

２．悪魔祓いとしての「言葉の錬金術」？

F.・シャルパンチエ　：　「錯乱 I、II」に行く前に、要約しましょう。彼は「すべての神秘を暴こう」としており、「ファンタスマゴリアの大家」であり、「黄金と薬」を作るでしょう[82]……。この後に続くものの中で深く体験される新しい科学の前提が素描されていると言い得ます。

Ph.・ソレルス　：　このように悪魔を通過すること、これらすべてはもちろん、ランボーによって非常にうまく構成され、出版されていますが、こののちに、われわれはあの異様な「***狂気の処女***」にたどり着きます。「地獄の夫」とは、数ある女性のうちの一人である「狂気の処女」という見事な創意を通して見られた、アルチュール・ランボーその人です。この時以来、狂気の処女たちが相当な広さの空間を侵略したというのもあり得ないことではありません。「狂気の」と「処女」という、組み合わされた二つの語はとても重要です。というのも思慮深い処女というのもいて……。

F.・シャルパンチエ　：　聖書の寓話の中に出てくる「思慮深い処女」[83]……。

Ph.・ソレルス　：　その通り……。そういう処女はもはや目に入っていないのです。この場合は明らかに自分を女性とみなしている男性です。彼は自分の地獄の夫について語りながら処女でありたいと望んでいます。

F.・シャルパンチエ　：　この「狂気の処女」は、「処女」という語に関して決定的に大きな間違いを犯しています……。というのも、これまで「被昇天」Assomption について多く語りまた書いてこられたあなたならお気づきかと思いますが、彼女は最後に「自分のかわいい恋人の被昇天」を見たいと言っているのです。筋が通っているのは「昇天」Ascension だと私には思われるのですが……。

Ph.・ソレルス　：　……全くおっしゃる通りです。その上このような混乱は完璧にヴェルレーヌを描き出していますね。彼は自分のことを、つねに「膣」cunt の開いた、ランボーの「雌豚」だと思っています。これもまたおのずと読み取れることです。

さて、これは見事なアンソロジーの一部分です。全部を引用することはできませんが、例えば「真の生活がないのです。私たちはこの世にいません」[84] とあります。ここでもまた狂気の処女「の」考えが表明されているのです。狂気の処女は地獄の夫を悪魔だと思っていますが、それは明らかに間違っています。しかしどうしようもありません。彼女にとって「***あれは男性ではありません***」*ce n'est pas un homme*[85]。これは非常に重要な発言です。何故なら男性存在の否定はランボーの時代から初めて始まっているからです。幸いなことに彼は、一八世紀の住人ではなかったにもかかわらず、この男性の解体がいかなるものであったかを、どんな重要なことが起こったかをしっかり見ていました。これ以降、男性に警戒しなければなりません。男性とは悪魔、淫奔な悪魔、淫蕩に渇いた強姦の悪魔なのです……。

F.・シャルパンチエ　：　……加えて、ギロチンも想起されていると思います。「本当に私の首ははねられるだろう。それは胸がむかつくことだろう」[86]。

Ph.・ソレルス　：　しかしあなたも気づいたでしょうが、狂気の処女の言葉で語られるこれらすべてはなんと純潔なことか。そして地獄の夫は言います、「私は女性が好きでない」。一方で「私は幸福の徴とともに女性を見る」[87] と。これは可能なことではありません。そのことを除いても、そもそも女性は禁じられていて……。

F.・シャルパンチエ　：　どういう点において男性存在に悪影響を及ぼしたものが女性存在に害をなしたのでしょうか？

Ph.・ソレルス　：　ちょっと、いいですか（笑い）。そのことについては多くのことが書かれました。まあ私も『女たち』の中で女性たちの乱痴気騒ぎと同志としての付き合いについて少し没頭してみました。実際どうしてあのような女性たちに「幸福の徴」を暴くようわれわれは励まさないのでしょうか。それは何故かと言うと一九世紀の狂気の処女と一緒にその傍に落ち込んではならないからです。さて「地獄の夜」のあと、ここにくるのは地獄の夫との「幾晩か」です。「彼の悪魔が私を捉えるので、私たちは転げ回っていました」[88]。もちろんここで考えられるのは「放浪者たち」[89] です。彼女が夫に授ける「教理問答の小娘の優しさ」[90] に関して言えば、われわれは相変わらず

82　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.265-266。
83　「マタイによる福音書」第 25 章 1-13。
84　「錯乱 I　狂気の処女」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.270。
85　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.271。この場合の homme は「人間」と訳されるのが一般的だが、対談の文脈で見ると「男性」と訳すほうが相応しいと思われるのでここではあえてこのように訳した。
86　「錯乱 I　狂気の処女」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.272。
87　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.271。
88　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.272。
89　『イリュミナシオン』「放浪者たち」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.346-347。
90　「錯乱 I　狂気の処女」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.273。

狂気の処女のもとにいます。そのうえ彼女はすぐに勢いに乗って改宗するでしょう……。結局ヴェルレーヌもマラルメも、全然ランボーを読んでいなかった。たんにランボーは「詩人」だったのです。彼らは***それ*** *ça* を読まなかった……。「空は屋根の上にある、かくも青く、かくも静かに」[91]、なるほど、分かります。しかしこちらは、こちらには別の……辛辣さがあります！　自分を地獄の夫と看做してすべてを見て取る、狂気の処女の素晴らしい描写が実際あります。「私には分かっていました……彼が社会にとって深刻な危険となるかもしれないことを」[92]。こんな風に打ち明けてくれてありがとう、狂気の処女よ。彼女はすでに社会の名のもとに語っています。このことは今では更にひどくなるばかりですね。さて続けますと、これはもうすでに言ったことですけれど、「彼はもしかしたら***生活を変える***ための秘密を持っているのかしら？」[93]がきます。そう、「もしかしたら」です。実際、みんな罠にひっかかっています。この件でアンドレ・ブルトンの悪事の現場を取り押さえるのは残念ですが、ことはかくの如しなのです。ああ、アラゴン、ああ、ブルトン。違います。「彼はそれを探しているだけよ、と私は自分に言い返しました」[94]。自分を女性とみなす男性以上に人は狂気の処女となることはできない。さて、なんという死刑執行人でしょう、この地獄の夫は。彼は狂気の処女と、イエス・キリストを義父として結婚したいとも思いません。彼は彼女に恥をかかせ、彼女を泣かせます。ああ、「彼がもう少し野蛮でなかったら！」[95]。その通り、おそらく彼を文明化しなければならないでしょう……。野蛮状態の神秘主義者、とクローデルは言っています。これは人を面食らわせる定式化ですね！　それでは文明化された神秘主義者がわれわれには必要なのでしょうか？

さて最後に、あなたがすでにご指摘なさった、「私のかわいい恋人の昇天」[96]に関する錯誤です。狂気の処女は、彼女のかわいい恋人が彼女のように処女であるにちがいない、そして昇天に出会うはずだと思っています。昇天について私は残念ながら言わねばなりません、それは一度しかなかった、それは唯一の、これをかぎりのものだった、と。それがあのような狂気の拡散から肉体を引き出すことができたのだ、と。誰も処女マリアを信じるよう強いられているわけでは全然ありませんが、処女マリアとは、ダンテの言うように、最も完璧な砂漠における、みずからの息子の娘なのです。私はこのことを何度も繰り返してきました。何故なら自分の母の父になるように求められる人間はほんの「一部」でしかないからです。これは不可能なことです、違いますか。このような近親相姦は常軌を逸しています……。

F.・シャルパンチエ　：　「私の無垢の広がりを眩暈を起こさず評価してみよう」ですね、実際。幸いなるかな、かくの如き御業をなし遂げる者は……。

Ph.・ソレルス　：　これに取りかかりましょう、「言葉の錬金術」に入りましょう。というのもそのことが起こるのはここなのですから。まず母音の色、そして子音の形態と運動、さらに文字通り「あらゆる感覚に」近づき得る詩的な言葉があります。「私は翻訳を控えていた」、「私は沈黙を書いていた」[97]……。こうして準備はできています。このとき、あなたは詩の一斉射撃を受けます。ところどころ訂正されていますが、断然、彼の中で最も良い詩群です。アンソロジーのような一斉射撃。何ヵ所か訂正されていますが、それらは極めて重要です。私はまずこれを取り上げます。「ついに、おお、幸福、おお、理性、私は黒から成る紺青を空から引き剥がした、そして***自然***という光 la lumière *nature* の黄金の火花となって生きた」[98]。

F.・シャルパンチエ　：　まさに、私はまず、この***自然***という光についてお聞きしたいのですが……。

Ph.・ソレルス　：　彼がそう言っている通りのものです。黄金の火花、それは自然なもの naturelle と言われている光とは何の関係もありません。何故なら自然は、この場合、黒の奥底から私に語りかけてくるものだからです。この次に続く詩のような流儀でです。これはとても有名な詩で、すぐに訂正されたものです。「あれが見つかった！　／　何が？　永遠が。　／　それは太陽と　／　混ざり合った海だ」であって、最早「太陽とともに　／　行ってしまった海」[99]ではないのです。太陽と混ざり合った海のほうが、ずっとエロティックです。

F.・シャルパンチエ　：　あなたはかつて、これが近親相姦的だとおっしゃいました……。

Ph.・ソレルス　：　もちろん。

F.・シャルパンチエ　：　それでは、こうした訂正（今度

91　P. ヴェルレーヌ『叡智』より。Cf.『ヴェルレーヌ詩集』橋本一明訳、pp.204-205、世界の詩集８、角川書店、1967 年。
92　「錯乱 I　狂気の処女」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.274。
93　同上。
94　同上。
95　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.279。
96　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.280。
97　「錯乱 II　言葉の錬金術」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.281-282。
98　同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.290。
99　ランボーは当初「それは　太陽とともに　／　行ってしまった海だ」C'est la mer allée / Avec le soleil としていたが、『地獄の季節』に引用するさい「それは　太陽と　／　混ざり合った海だ」C'est la mer mêlée / Avec le soleil と訂正した。

ばかりはあなたはこうしたことを指摘した最初のひとりだと思いますが）を行う前、ランボーはもう得意になっている……

Ph.・ソレルス　：　……お話ししますよ……。

F.・シャルパンチエ　：　新しい言葉を発明している、と。そしてこの言葉をもって、彼は自分の詩を書き直すことができると思っている……。お聞かせください。

Ph.・ソレルス　：　その点についてお話します。私の小説『ステュディオ』の冒頭句は「私は魔術的な研究をした　／　幸福についての。それを誰も巧みにかわしたりはしない」J'ai fait la magique étude / Du bonheur, qu'aucun n'élude です。私がこの冒頭句を『地獄の季節』の形態で出版するや否や、憤慨の嵐を私は浴びたのです。つまり、これではない、誤りだ、訂正すべきだ、といった[100]……。

F.・シャルパンチエ　：　ここでもまたランボーは読まれていない？

Ph.・ソレルス　：　もちろん。だがただたんに読まれていないだけではありません。聴かれていないのです！　というのもランボーは聴かなければならないからです。「それを誰も」Qu'au-cun のすぐあとに「雄鶏」coq があります。「幸福についての。それを誰も巧みにかわしたりはしない。　／　あいつに挨拶を送ろう　／　ガリアの雄鶏が歌うたびに」Du bonheur, qu'aucun n'élude / Salut à lui, chaque fois / que chante le coq gaulois。ガリアの雄鶏は記憶の中で……あの「コック」coq と……。

F.・シャルパンチエ　：　聖ペテロの？

Ph.・ソレルス　：　……英語で男性器のことを「コック」cock と言いますよね……。

F.・シャルパンチエ　：　ああ、そうですもちろん。私は雄鶏の歌で聖ペテロのことを思っていました。この場合は「悪い血」におけるのと同じくガリアの雄鶏ですが……。

Ph.・ソレルス　：　それもあり得ます……。しかしこれは雄鶏なのですから……言わば男性的です。それから、見出された永遠の詩において、彼は自分の魂を「お前」と呼んでいます。これはよくあることではありません。「お前は解放される、人間の投票から　／　共同の高揚から！　／　お前は気ままに飛ぶ……」[101]。さてこの「気ままに」selon は、私は必ずそうしてきましたが、実際もっと展開する必要があります。そしてすぐさま、「私は架空のオペラとなった」[102] です……。するとここに新しい理性が登場します。「かくして、私は一匹の豚を愛した」[103] というフレーズについて、これはヴェルレーヌとは関係ないとみんな言うでしょう。ところが勿論関係あるのです！ ヴェルレーヌの詩の淫奔さには圧倒されます。そのことについて私は評論「レーザー光線にさらされたロートレモン」で述べています。この評論はここにありますが（*と言ってソレルスは一冊の『フーガ』という本を見せる*）、まあ、たいして重要ではありません。しかしここで私の興味を引くのはむしろ狂気です。「狂気のいかなる詭弁も、――人が閉じ込める狂気の――」、注意しましょう、「私によって忘れられはしなかった。私はそれらすべてを繰り返し言うことができるだろう。私はその体系を握っている」[104]。自分は架空のオペラとなったとまず言います。そして道徳は脳髄の弱さだなどと言う誰かがいるとしたら、彼はそれを炎の文字で書く必要があるかもしれませんね……よく分からないですが……トロカデロあたりで。

F.・シャルパンチエ　：　……（ロートレアモンの）「ぶよぶよの大頭ども」[105] のことも同じく思われますが？

Ph.・ソレルス　：　同じですね……。道徳は……脳髄の弱さである……。『善悪の彼岸』。ニーチェの見た小道徳 moraline につながりますね。それがすべてを腐敗させている。われわれはかつて以上にそういう状態にあります。

F.・シャルパンチエ　：　「人はわれわれに善悪の樹を闇に葬ると約束した」[106]……。

Ph.・ソレルス　：　小道徳はですね、あなた、小道徳は人間的であると言われる反射的行動すべてを侵しています。そのことは日に日に絶え間なく確認されています。小道徳、ああ！　道徳の系譜学！　いやはや、奴隷の道徳……、いや、違います、われわれはもう奴隷ではありません。道徳は脳髄の弱さなのです……。しかし私がこだわりたいのは「私はその体系を握っている」です。これは異常な表明であって、これについて多くの注釈を私は聞いたことがありません。この表明が言わんとするのは、新しい

100「おお　季節よ　城よ」で始まる詩の当該箇所は、最初は「私は魔術的な研究をした　／　幸福についての。それをいかなるものも巧みにかわしたりはしない」J'ai fait la magique étude / Du bonheur, que nul n'élude であったが、『地獄の季節』に引用されるさいに「いかなるもの」nul が「誰も」aucun に訂正された。

101「錯乱 II　言葉の錬金術」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.294。

102 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.292。

103 同上。

104 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.292-293。

105 I. デュカスからダラス宛て 1870 年 3 月 12 日付け書簡。Cf.『ロートレアモン全集』前掲書、p.390。

106「陶酔の朝」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.333。

理性によって、あなたは狂気、人が閉じ込める狂気の体系を握るわけです。それはあんな風な……狂気とは違う……。

F.・シャルパンチエ　：　「取り憑かれている」possédée 狂気とは違う……。

Ph.・ソレルス　：　これは、ランボーがそのあとすぐに言っているように、きわめて危険な体験なのです。「私の健康は脅かされた。恐怖がやって来た」[107]。恐怖、これは、われわれが関わっているのはみずからを徐々に恐怖に陥れるものたちであるということを知るにはとても重要な単語です。そしてあなたはこれを大文字のTで書くこともできます。そうすると「恐怖政治」Terreur となります。さてと、(*また読む*)「幸福は私の宿命、私の悔恨、私の蛆虫だった……。《幸福》！　その、死に優しい歯は、雄鶏の歌で私に警告するのだった」[108]。また雄鶏です。ここでまた教会で用いられるラテン語がまったく違った文脈の中であらわれます。「最も暗い様々な都会で、***朝ニ*** *ad matutinum*、――***キリストハ来給エリ*** *Christus venit*――の祈りの頃」[109]。恐怖の体験をしたあとこれは無視できないことです。そのあと、御覧の通り、あなたは突然、そう突然に、テキストの冒頭部分に行きます。「それは過ぎ去った。私は今日美を讃えるすべを心得ている」[110]。それでは、膝の上に乗せ、侮辱していた美というのは、過ぎ去ったものなのですね。私は今日美を讃えるすべを心得ている。このことを『イリュミナシオン』のすべてがあなたに語っています。つなげさえすればいいのです。二つのテキストを同時に読まなくてはなりません……。さて今度は「不可能」ですが……。

F.・シャルパンチエ　：　その前に、もう一言だけ。できればもう少し前に戻って、「***自然***という光」la lumière *nature* について伺いたいのです。「初めに言葉があった（ある）。そして言葉は人の光であった……」[111]。

Ph.・ソレルス　：　はい……。

F.・シャルパンチエ　：　これはあなたがおっしゃった自然な naturelle 光ではないですよね、つまりその光は……。

Ph.・ソレルス　：　昼の……。

F.・シャルパンチエ　：　そうです。あるいは創世記にあるような「小さな光」や「大きな光」[112]の光ではない。そうではなくそれより以前の光であって、最初の「昼」の光の本質のような光ではないですか……。

Ph.・ソレルス　：　「***暗闇カラノ光***」*Ex tenebris lux* です。暗闇に包まれている光です……。このことを理解した唯一の人は、と言うよりは、暗闇から外に出る光をいわば音で聴くことができるのは、ハイドンの『天地創造』の冒頭部分においてです。これも一つの体験ですね。(*読む*)「今日では女たちとわれわれはほとんど合意し合っていないというのに、女たちの清潔さと健康の寄生虫となり、機会があれば愛撫の一つも逃さなかったあのお人好しどもを、私が軽蔑するには理由があった……。私の侮蔑すべてには理由があった。というのも私は脱走するのだから」[113]……。まあ、脱走するのはいいでしょう。しかしその前の部分、今日ではわれわれは女たちとほとんど合意しあっていないというのに、女たちの、注目してください、「寄生虫」となっているお人好しどもというのを強調する必要があります[114]。しかしこの無理解はいっそうひどくなり続けています。そこでランボーは彼ら、地獄に堕ちた者たちを見る。だが彼らはまだ生きている。彼らは偽りの選ばれし者たちなのです……。

F.・シャルパンチエ　：　そのあと、ランボーは、西洋と東洋を同時に掃き去りながら、すぐに時間と空間に移ります……。

Ph.・ソレルス　：　ええ。「***東洋カラノ光***」*Ex oriente lux*、と言ってもいいでしょう。だがこれはうまくいかない。おそらく次の表現を、光輝く大文字にして、コンコルド広場か他のところで強調するべきかもしれませんよ。それは「コーランの私生児の叡智」[115]というものです。

F.・シャルパンチエ　：　イシマエルは（アブラハムの）召使の女ハガルの息子だということを、彼は思い出しているのでしょうか？　人はそのことを思い出すでしょうか？

107「錯乱 II　言葉の錬金術」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.293。
108 同上。
109 同上。
110 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.295。
111「ヨハネによる福音書」第 1 章 1-4。
112「創世記」第 1 章 16。
113「不可能」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.296。
114 ソレルスは自作の *Les Voyageurs du Temps* の中で「寄生者」Parasites と「獣」Bête との間の寓話を展開してい Cf. Philippe Sollers, *Les Voyageurs du Temps*, Gallimard, 2009。
115 原文は la sagesse bâtarde du Coran。宇佐美斉訳「コーランのあの素性のあやしい叡知」、鈴木創士訳「コーランの折衷的な叡智」、平井啓之・中地義和訳「コーランのあの折衷的な英知」と訳されているが、対談ではアブラハムの私生児イシマエルが話題となっており、またアラビア人はみずからイシマエルの子孫であると称しているようなので、あえて「私生児の」と訳した。Cf.『キリスト教百科事典』、エンデル書店、1960 年、p.130。

Ph.・ソレルス　：　ええ、そうですね……。とにかく彼は自分が何について話しているか少しは分かっています。というのも彼の父がコーランを翻訳しているからです。だから彼は一二か一三歳のときにそれを読んでいます。そのことを証明する草稿がありました。ということで「私生児の叡智」。この表現は随分激しいですね。ランボーはみずから「イスラム嫌い」であることを証しているのでしょうか？　続く報告では彼はとても弛緩しています。地獄にいるのは結局他の人々と同じ程度に「ニグロ」である人たちなのです……。それでもやはり「私生児の叡智」という表現がある。「私はコーランの私生児の叡智は目に入らなかった」[116]。感じられるのは、彼は改宗しないだろう、彼はムスリムにならないだろう、彼は目の前にあるものを取るだろう、ということです。同様に彼は仏教徒にもならないだろう。さて、そのあとはキリスト教で、みずからに問いかけることが中断されます。「プリュドム氏はキリストとともに生まれた」[117]。これはある種の年号の変化で、いわばキリスト教は死んだと宣告されているのです。オリエントの叡智、原初の祖国、これらも何ももたらしません……。そうすると……。

３．帰還の鍵？

F.・シャルパンチエ　：　今私の頭に思い浮かんでいる問いは特別に『楽園』の著者に向けられるものです。ランボーが「本当に、私の夢見ていたものはエデンの園だ」[118]と言うとき、エデンの園はここでは偽りの起源を示しているわけではない。そのあと彼は自分の夢のためにエデンの園を遠ざけますが、それは幻想的に根源的で太古の純粋さかもしれないのです。エデンの園は、テキスト、あるテキストの始まりを示す語です。楽園とエデンの園のあいだに関係があるのか、同一性それとも差異があるのか言っていただけますか？

Ph.・ソレルス　：　エデンの園は楽園ではありません……。申し訳ないですが、ここでまたダンテを出させてください。彼は避けて通ることができない……。

F.・シャルパンチエ　：　そしておそらくカフカもでしょうね。カフカは言っています、「もし楽園で破壊されたものが破壊できないものであったとしたら……」[119]。

Ph.・ソレルス　：　そうです、そうです……。でも、もう少しくわしく言ってください……。

F.・シャルパンチエ　：　「かつては私の生活は宴だった」。ここには「偽り」のものではないかもしれないもう一つ別の「起源」があるのではないですか？

Ph.・ソレルス　：　エデンの園、それは宴の場所ではありません。それは一つの庭園であって、その中では善悪の樹を食べてはならない……。

F.・シャルパンチエ　：　それ一つだけで、他のものは食べてもいいのです。

Ph.・ソレルス　：　これはとても聖書的ですね……。

F.・シャルパンチエ　：　はい……。

Ph.・ソレルス　：　……楽園、それは、理性、ダンス、音楽、恍惚的な旋回となった幻覚のことです……。同時にそれに、あなたがお好みなら、人間的な、あまりに人間的なものとして現れ得るものすべてを一新する眼差しがともなっています。それがつまりダンテの楽園なのです。すなわち「私」を通して表明され得る多数性です。これは同時に「われわれ」を通しても表明され得ます。ダンテを読み直さなければなりません。ここではしかしランボーはこれにアクセスすることはありません。何故ならそれは彼に閉じられているからです。「世界に年齢はない。人類は移動する。ただそれだけだ。あなたたちは西洋にいるが、東洋に住むのも自由だ」[120]。しかし……最も根本的な開口部があるのは西洋においてなのです。

F.・シャルパンチエ　：　それでも、もう少し強調させてください……。ランボーのテキストには、端緒となる過去「かつては」と、最後の預言者的な未来「私には許されるだろう」があります。

Ph.・ソレルス　：　もうすぐそこにたどり着きます。

F.・シャルパンチエ　：　私が申し上げたいのはこういうことです。このエデンの園というのは、とにかくそういう語が言語の中にただたんに存在しているのですし、たとえそれが聖書的であるにせよ、おそらく時間の中にも空間の中にも存在しないような唯一のつかみどころではないか。人がその中に住まざるを得ないと看做されている時間は歪められており、空間も等しく虚構のものとなっているのですから。

116「不可能」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.298。
117 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.299。
118 同上。
119 F. カフカ「自撰アフォリズム　74」。Cf. F. カフカ『夢・アフォリズム・詩』吉田仙太郎編訳、p.179、平凡社ライブラリー、1996 年。
120 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.299-300。

Ph.・ソレルス　：　お望みならそれでも結構ですが、しかし……エデンの園から、あなたは追放されていると思われるのですが……。

F.・シャルパンチエ　：　カフカは、人はまだ楽園にいるのだが、そのことに気づいていないのだと言っていますが[121]……。

Ph.・ソレルス　：　カフカが仮説を述べているのでなければ、実際そういったすべてはたわごとにもなり得ます。確かにカフカの言うとおりに楽園は継続してあり得たかもしれない。そうです、それはそんな風に継続し得たのかもしれませんが、ただその場合、あなたはもう人間的と言われる世界に、つまり性の分裂には関わらなくなるでしょう。この分裂、この二つの性のあいだの戦争、これらすべてはまた否定されようとしています。これはやはり奇妙なことです……。

F.・シャルパンチエ　：　確かに。

Ph.・ソレルス　：　そうすると、こうした否定性から解放される必要があるでしょう。それがエデンの園あるいはエデンの園の復元なのでしょうか？　ふむ……。カフカが、誰も、いかなる人間も直面しようとしない仮説について述べていることのうちには、並外れた開口部があります。つまりカフカは、……これを述べているとき「時間の籠」の外に出ているのです。この表現はロートレアモンのものです[122]。

F.・シャルパンチエ　：　あるいは、彼は「人の熱中する時」[123]を再び見出している……。あなたはたびたびポエチックな生活について語られています。それは非常に秘められたものであり得る。というのは誰もそんな生活では何もしようがないからですが（笑い）……。

Ph.・ソレルス　：　その方面は本当に静かなものですよ（笑い）……。よし、もっと続けましょう。「地獄の夜」を過ごしたあとに来るのは「朝」です。ごらんのとおり、われわれはまたすぐ冒頭部分に戻ります。「私にも***一度は***黄金の紙に書きとめるべき愛らしい、英雄的な若さがなかったか？」[124]という表現はすなわち「私がよく思い出してみると、私の生活は宴だった」ということです。では「いかなる罪によって私は現在の青春に値するようになったのか？」[125]。ああ、失墜、失墜があったのです……。彼はまるで「ずっとパーテルとアヴェ・マリアを唱え続けている乞食」[126]のようになります。「***私はもはや語るすべを知らない！***」[127]。ここでもまた全体がイタリック体です。そして前に読んだ部分と反響しています。しかし、しかし、「けれども、今日、私は自分の地獄との関係を終えたと思っている。確かにこれは地獄だった、古い地獄、人の子がその扉を開いた地獄だった」[128]。地獄？　古い地獄？　ええ？　人の子が古い地獄の扉を開いた？　それではおそらく新しい地獄があるのでしょうね……。だとすると多分、個人的な救済に値するように生きねばならない。というのも、もちろん、われわれはおそらくこの地上でクリスマスを、天上界の歌を、人民の歩みを祝うことになるのでしょう。そう、そう、多分。……。しかしこれも同様にうまくいかないのです。ランボーが「われわれは神聖な光の発見に身を投じている」[129]と言うとき、この「われわれ」とは誰なのか？　「季節に従って死んでいく人々から遠く離れて」[130]。そうです、ここには『地獄の季節』という題名の一部が織り込まれています。かくして人々は季節に従って死んでいく。このときあなたはハイデガーが「時間の季節性」le saisonnement du temps[131]と呼んでいるものと関わっています。つまり時間を季節として認知する別の知覚のことです。そうすると地獄とはひとつの季節である。もしあなたが地獄をひとつの季節として受け入れることができるなら、これを言い換えると、ほかに三つの季節があることになります……。

F.・シャルパンチエ　：　……それは「野蛮人」[132]にまで延長されているのでしょうね。「日々や季節のずっと後に……」[133]。

---

121 F. カフカ「自撰アフォリズム　64」。Cf.『夢・アフォリズム・詩』前掲書、pp.175-176。
122 ロートレアモン『マルドロールの歌』「第二歌」。Cf.『ロートレアモン全集』前掲書、p.112。
123「いちばん高い塔の唄」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.286。
124「朝」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.303-304。
125 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.304。
126 同上。
127 同上。
128 同上。
129「別れ」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.305。
130 同上。
131 Cf. M. ボス編 M. ハイデガー『ツォリコーン・ゼミナール』木村敏・村本詔司訳、pp.235-236、みすず書房、1991 年。「『存在と時間』の中の「時熟する（zetigen）」と「時熟（Zeitigung）」のフランス語訳についての質問に対するボーフレの返事ですが、彼は『存在と時間』が、この「時の実り（saisonnement du temps）」、つまりそこへと向かって現在（une présence）が絶えず流れ込む「時の実り」を、それとは逆に絶えず流れ去る時間と対置しているといいます」。
132『イリュミナシオン』「野蛮人」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.362。
133 同上。

Ph.・ソレルス　：　（*読み続ける*）「……慈愛は私にとって死の姉妹なのだろうか？」[134]。とても重要です、この部分も。というのもわれわれはここでまたあの冒頭部分、あの最後の「**ぎゃっ**」に戻っているからです……。それから、違う、これらすべては嘘偽りであった。次にここでわれわれは全く異様な何ものかにたどり着きます。「新しい時」、お望みならこれを新しい地獄と言ってもいいでしょう。「新しい時は少なくともきわめて厳しいものだ」[135]。日付を入れておきましょう。われわれは一八七三年の四月から八月にいます。ここには最早まったく「われわれ」と言わず、「私」と言う何者かがいます。「勝利はわが手中に収められたと私は言い得る」、「悪臭放つ溜息は鎮まる」、ふむ、ふむ、「私の最後の後悔も立ち去る」[136]、おお、おお、こういうものすべては「死の友たち」にとって良いものなのです。最も重要な警句はこれです、「死の友たち、あらゆる種類の精神薄弱者たち」[137]……。こういう人々が大勢いるわけです。

F.・シャルパンチエ　：　死の友たちというのは時代によって変化するのですか？

Ph.・ソレルス　：　だんだんと増えていきます。

F.・シャルパンチエ　：　ランボーはこの前のところでこう言っています、「いや、いや、私は死に対して反抗している！」[138]。人は死に対して反抗できるのでしょうか、Ph.・ソレルス？

Ph.・ソレルス　：　いいえ。それには何の意味もありません。

F.・シャルパンチエ　：　それではこの表現にどんな意味があるのでしょう？

Ph.・ソレルス　：　人は、「死ぬこと」を分かち合おうとするとても奇妙な性向を測ってみることができる、ということです。これは全く違ったことです……。

F.・シャルパンチエ　：　では、それがこの不思議な表現で彼が言いたいことなのですか？

Ph.・ソレルス　：　はい……。さて今度は、「……勝ち取られた地歩を保ち、……私の背後にはあの恐ろしい灌木しかない……」[139]。

F.・シャルパンチエ　：　まさに細かい部分の問題なのですが、この「灌木」とは？

Ph.・ソレルス　：　これについては多く注釈されてきました。善悪の樹であるとか……。

F.・シャルパンチエ　：　ヨナの「とうごま」[140]では？

Ph.・ソレルス　：　ええ、ええ……。「あの恐ろしい灌木」というのは不思議なものです、確かに。灌木は、樹ではない。萎びて小さい樹です。それは同様に死の樹も意味しません。もしあなたが善悪の樹や、生命の樹について語るのであれば、あなたが関わっているのはとても大きな樹だという気がしませんか？（笑い）。そしてその樹の影は全人類を見下ろし、それももっともであって……。

F.・シャルパンチエ　：　……そして（あなたの小説）『晴れ間』の始まりを飾るあのとても美しいヒマラヤ杉[141]の影でもない？

Ph.・ソレルス　：　あ、それは関係なくもないのですが……。

F.・シャルパンチエ　：　……いずれにせよ、固執したいわけではありませんが、「背丈の高い」樹との関係でいえば、仮説ですが、私はまっすぐにヨナの「とうごま」のことを思ったのです。容赦されたニネベの住人たちに復讐しようという気持ちにまさにヨナが駆られそうになるとき、神の太陽によって萎らされるもの、恐ろしいものです。「地獄に堕ちた者たちよ、私が復讐していたなら」……。これこそが枯れた恐ろしい灌木ではないか……。

Ph.・ソレルス　：　ああ、多分そうでしょう……。いずれにしても、これは復讐の精神の放棄を意味しているというのが重要です。何故ならそれはやはり人間的な情熱だからです……。二つの情熱があります。復讐の精神ともう一つは何も知るまいという意志です。人間はそれらにまったく燃えあがるように取り憑かれています。もっともそれはおそらく同じものかもしれませんが（笑い）……。われわ

134「別れ」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.307。
135 同上。
136 同上。
137 同上。
138「閃光」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.303。
139「別れ」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.308。
140「ヨナ書」第 4 章 6-7。
141 Cf. Ph. Sollers, *L'Eclaircie*, p.11, Gallimard, 2012。「何故かすぐにそう思う。僕は庭の、あるいは壁から通りにはみ出しているヒマラヤ杉を、そこから大いなる祝福が放射しておりそれが世界に広がっているのだと考えずに見ることはできない」。

れは一挙にグノーシス的な立場に事実います。すなわち造物主は「良い」神ではないという……。

でもまあ私の考えでは、恐ろしい灌木が過去に「あった」。しかしそれはもう問題ではない。つまり、エデンの園をめぐる聖書的な意味の駄弁の中での、あの善悪の樹、生命の樹の有名な話はもう問題ではない。問題は戦争であり、精神の闘いなのです。神は正義のヴィジョンに委ねられる。それだけです。神は正義を有効なものとすることにしか関わらない。正義を見るのは神なのです。恐ろしい灌木とは、善悪の樹あるいは生命の樹のなれの果てなのです。もうそれは問題ではない。

F.・シャルパンチエ　：　それほどに？

Ph.・ソレルス　：　はい。

F.・シャルパンチエ　：　それでは、手が触れていないもの、無傷なものとは何ですか？

Ph.・ソレルス　：　手が触れていないもの、ですか？　それは結局、次の「私は彼処で女たちの地獄を見た。――そしていずれ私には***ひとつの魂とひとつの肉体に真実を所有すること***が許されるだろう」[142]という驚くべき表現とともに、偽りの恋愛、嘘つきのカップルを、それでもやはり明快に明瞭に見ることなのです。ひとつの魂とひとつの身体に真実を所有するほど脱・主体化された主体とは何でしょう？　それこそが手を触れていないものです。ただたんにひとつの魂とひとつの身体に具肉化した真理です。私は取り憑かれていた（私は所有されていた）J'étais possédé。私は所有する（私は取り憑く）Je possède。このposséderという語はたいへん強い意味を持っています。さてこれらすべての背後で、死の友たちのあの嫉妬があります。「地獄に堕ちた者たちよ、私が復讐していたなら！」[143]。復讐の精神は乗り越えられている。つまり、あなたもその警句をご存じのある者がそう言ったのと同じです。ある者とはニーチェのことです[144]。そしてハイデガーもその点について強調することをやめていません[145]。すなわち時間とその「それはかつてあった」に対する意志のルサンチマンです。言い換えると、それは否定された束の間性であり、時間それ自身に向けなおされたルサンチマンと復讐の精神です。しかし復讐するには及ばない。そして「絶対に現代的でなければならない」[146]。これを理解すべきなのは、近代芸術や現代芸術のカタログを作るという意味においてではなく、あきらかに次のような意味においてです。絶対に現代的である、それが言わんとすることは、この世にはもうひとつ別の時間があり、それが作動しているということです。その別の時間とは、親愛なるシャルパンチエさん、このパッセージでただたんに「私」とあなたに言っている者のことです。そして「私」はもはや一個の他者ではなく、「私」は「私」であり、作動しているのはこの「私」、つまり地獄を通過した者なのです。しかし次の点を強調しなくてはなりません。「私は彼処で女たちの地獄を見た」[147]（これに狂気の処女たちの地獄も含まれます）。この「彼処」とはどこにあるのか？　ああ！　それで私は「見た」というわけです。そして未来。「そしていずれ私には***ひとつの魂とひとつの肉体に真実を所有すること***が許されるだろう」[148]。これは魂と身体を、別々にではなく、一緒に新しいものにするのです。魂と身体のあいだに最早葛藤はありません。このような葛藤に関する関連図書ならあなたはすべて持っていますよ。ここで私たちは異常なほど穏やかで驚異的な命題の中にいます。そこからこのテキストの力が生まれています。

F.・シャルパンチエ　：　このテキストは何に通じているのですか……。

Ph.・ソレルス　：　この後は実際、あなたの望むところに通じています。順序は関係ありません。大洪水[149]という理念に、「別様に称賛に値する発明家」[150]に、愛の鍵[151]に、諸々のことに通じています……。ここから出発すると、『イリュミナシオン』のすべてが、「精霊」[152]に至るまで、あなたに訴えかけます。まったく見事なテキストです……。しかし結局ここで私を最も打つ警句は、まさにこれです、「そしていずれ私には***ひとつの魂とひとつの肉体に真実を所有すること***が許されるだろう」。ランボーは「所有するposséder」からあと（のフランス語）を強調しています。強調しないこともできたはずだったのに、彼はそうしている。

F.・シャルパンチエ　：　そして締めくくっていま

142「別れ」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.308。
143 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.307。
144 Cf. F. ニーチェ『ツァラトゥストラ』前掲書、上巻、「救済について」、p.255。「時間とその《そうあった》とに対する意志の敵意、これが、いやこれのみが***復讐***そのものなのだ」。
145 Cf. M. ハイデガー『思惟とは何の謂いか』四日谷敬子・H. ブフナー訳、pp.97-120。「ニーチェの思惟は、復讐の精神からの救済に向けられている」(p.98)。
146 同上。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、p.308。
147 同上。
148 同上。
149『イリュミナシオン』「大洪水のあと」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.313-314。
150「生活　２」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.328-329。
151 同上。
152「精霊」。Cf.『ランボー全詩集』前掲書、pp.382-384。

す……。

Ph.・ソレルス ： 彼は日付を付しています。一八七三年四月から八月と。一五年後の一八八八年九月三〇日、ニーチェはトリノで「救済歴」元年を宣言します。従ってわれわれは今日「救済歴」一二五年にいるのです。つまりこれは始まりにすぎないのです、結局。

おわりに

以上が対談による『地獄の季節』についてのソレルスの解釈である。地獄へ行きそこから帰還するとはどういうことか。彼の解釈を全体としてまとめてみると大体こういうことになるだろう。ランボーにとっての地獄、それはまず一八世紀の不在として現れる。簡単に一八世紀と言えばそれは啓蒙 Les Lumières（光）の世紀を意味するであろう。人間存在に普遍的に備わるとされる理性という光によって迷妄や迷信あるいは因習や旧弊を打破し、百科全書的な知と繊細な感受性を同居させつつ、よりよき社会のために開放を呼びかける世紀である。しかし大革命は一八世紀の首をはねてしまう。一九世紀は人権宣言によってすべてが授けられた家庭のものであり、ロマン主義的な主体の時代である。ロマン主義とは一八世紀の普遍主義に対するある種のナショナリスティックな反動ととらえることができる。良家の家庭、ロマン主義者、それらはみなランボーにとって劣った種族、ニグロたちである。ロマン主義的な主体は、孤独、憂愁、倦怠、デカダンスに蝕まれている。前世紀の光とは対照的に降霊術やオカルトに没頭している。啓蒙が退けたはずの蒙昧がまた復活しているのだ。前世紀において普遍的な人類に向けられていた政治的理想は、一九世紀ではナショナルな隣国憎悪にとって代わられている。ランボーはロートレアモンとともにこのようなロマン主義を清算しようとし、ロマン主義的な主体とは違った主体、一九世紀的な理性とは異なる新たな理性を建設しようとする。またランボーにとって地獄とは女たちの地獄、死の友たちの地獄である。彼らはルサンチマンと復讐の精神に取り憑かれており、ランボーは一つの魂と一つの身体に真理を所有しようと死の友たちに別れを告げる。そして地獄から帰還したのちのランボーは『イリュミナシオン』という楽園の光の中で舞踏する、というわけなのだろう。

おおよそこのような見取り図の上に、グノーシス的な解釈、ニーチェ的、ハイデガー的なニヒリズムの克服、ルサンチマンからの解放、新たな価値の創設といったヴィジョンが付け加わっていると思われる。

ソレルスによればロートレアモンもランボーもグノーシス派である[153]。グノーシスの教義では創世記の造物主は誤りを犯しており、その造物主以前の、天地創造以前の根源的光こそ真の至高神なのである[154]。ランボーが「***自然***という光 la lumière *nature* の黄金の火花となって生きた」と言うとき、ソレルスは、ランボーはグノーシス的な根源的光と出会っている、と考えていると思われる。

上にも賤民、下にも賤民しか見られず、怨恨と、疾しさが渦巻くニヒリズムの世界から、自由に舞踏することを意志するニーチェの哲学は、ランボーの「お前は解放される、人間の投票から ／ 共同の高揚から！ ／ お前は気ままに飛ぶ……」という詩句に言い表されているのではないか。またそのような解放はハイデガーの分析する通常の時間の様態とは異なる時熟の形態をもつのであろう。

このような解釈の途中でブルトンの「世界を変革する、とマルクスは言いました。生活を変える、とランボーは言いました。この二つのスローガンはわれわれにとって一つにしかならないのです」という発言が槍玉に上がっているのだが、あえてブルトンを弁護すれば、たとえこの言葉が狂気の処女の口から出たにせよ、そしてそれが「もしかしたら」でしかないにせよ、新たな愛、新たな理性、新たな音楽を発明し、光の中で舞踏することを未来に託すことは、結局生活を変えるという素朴な言い回しにも凝縮し得るのではないかと思われるのだが、どうであろうか。

いずれにせよここでソレルスはランボーを詩人としてだけでなく形而上学者としても扱っており、そのことがこの解釈に、たんに字句の詳細な意味や語源の探索にとどまらない、つまりはたんに文学的な注釈にとどまらない、価値評価的で思弁的な広がりを与えていると思われる。一八世紀の不在とロマン主義そのものを地獄として捉える視点は大胆なようにもみえるが、ランボーのテキストに厳密に従っていけばそういうことになることもソレルスに指摘されてはじめて訳者は了解した。訳者もまたランボーをたんに詩人としてのみ読んでいたのである。ランボーをのちのニーチェやハイデガーにつなげ、さらにグノーシス的なヴィジョンのもとでみると、ソレルスにとってのランボーがどのようなものなのか明確になる。ソレルスにとってランボーはニヒリズムを克服するために闘った精神の闘士であり、新たな理性、新たな時間の様態を先駆的に予知した者なのだ。また彼にとってランボーはロマン主義的な主体と道徳双方に対する批判という点においてロートレアモンと切り離せない。ソレルス自身も現代社会に対する批判をやめていないが、彼がランボーとロートレアモンを常に引用することによって分かってくるのは、ソレルスもまた現代社会をロマン主義的なものとして捉えているということである。ということはソレルスにとっても現代社会は地獄として映じているということであろう。地獄へ行きそこから帰還するというのは、地獄的な様相を呈する社会を批判し、同時にその社会から解放されるような視座を獲得する、ということなのであろう。またランボーははたしてキリスト教的だったのか非キリスト教的だったのかという、かつてクローデルとブルトンとの間で激しく論争された問題があるが、グノーシスという項をもってくることで、キリスト教的なものの内部と外部がうまく収まる感もある。

153 Cf. « La Connaissance comme Salut » dans *L'INFINI*, no.107, Eté 2009, pp.33-45.
154 Cf. 大貫隆『グノーシスの神話』講談社学術文庫、2014 年。

同時にそのことによってソレルスの内部ではクローデルとブルトンは排除しあったりせずに共存できているのだろう。

ランボーをたんに研究のあるいは愛好の対象とするのではなく、これほどまでにみずからの生きざまの血肉としている文学者を訳者は寡聞にしてあまり知らないが、できれば訳者自身も自分が読んだものを、自分の思想や行動の実質的な血肉にして生きていきたいと願うのである。

フィリップ・ソレルスによる『地獄の季節』の解釈

小山尚之

（東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門）

要旨： 本稿は二〇一三年に「ランフィニ」誌第一二二号に掲載された「《地獄の季節》：行くこと―帰還すること」と題された記事を日本語に訳したものである。ソレルスによれば一八世紀の不在とロマン主義的な社会あるいは主体はランボーにとって地獄として現れる。地獄へ行くとは同時代の社会を批判するという意味である。しかし同時にランボーは新たな理性や新たな形態の愛を発明することによって地獄から帰還しようと努める。この点でソレルスはランボーのうちにニーチェとハイデガーの先駆者を見出している。それに加えてソレルスはランボーが始源におけるグノーシス的な光によって照明されていると考えている。

キーワード： フィリップ・ソレルス、アルチュール・ランボー、地獄の季節、ロートレアモン